



多声的で小さな物語を聴くことの意味 — 災禍を生き抜くレジリエンスとコミュニティ

(2018.12.27 実施)

村本 澤野先生，川野先生，貴重なコメントをありがとうございました。最初に一人ずつ，おふたりのコメントに対するレスポンスをし，そのうえで後半，自由に議論することができたらと考えています。最初に私からいきます。

公共人類学と臨床心理士のフィールドワーク

澤野先生のコメントは，批判的なことは書かれておらず，遠慮されたのではないかとも思いましたが，公共人類学という分野を教えて頂き，文献を取り寄せ読んでみました。支援活動を被災地への入口としてフィールドワークを行った人類学者たちの研究は，私たちが最初に狙ったプロジェクトの形に限りなく接近していると感じました。ただ，アクティブ・インタビューについても書かれていましたが，もともとこのプロジェクトでは，インタビューという形を想定していませんでした。単純な出会いと対話，インタビューというより自然な対話を基本に，証人としての役割を担う。

これは，やって初めてわかったことですが，臨床心理士としてトラウマ・サバイバーたちと関わるなかで証人としてあることと，被災地のフィールドで証人としてあることとはずいぶんと違う意味を持っているようです。現地では，臨床心理士としては話を聞かないということを意識してきました。臨床心理士というのは，基本的には語ってもらう，問題になっていることを理解するために，うまく話を引き出すように聞くので，それはするまいと思っています。何かアンフェアな感じがするからです。語らないこと，理解しないことも含め，ごく自然な出会いや対話を意識しています。

そうは言っても，臨床心理士というのは必ずしも

自分の役割，職業として纏っているだけのものでもなく，自分に張り付いてあるというか，ショートストーリーにも書きましたが，もしかすると，自分のあり方が本来語られないことを引き出してしまったこともあったかもしれません。そういう意味で，人類学者のフィールドワークと，ふだん臨床心理士として働いている者が現場に入るのとは，結果として語られる物語は違うかもしれません。もちろん，個別性の方が強いと言えるのかもしれませんが。

ただし，長く通って関係ができて，もっと知りたいこと，研究したいことが明確になってきた場合には，あらためてインタビューという形で次の段階に進む。そこは，明らかにプロジェクトから研究へとフェーズが変わるわけですが，たとえば，今は，ライフストーリー・インタビュー，エスノグラフィーという形で，少しずつ表現しようとしているところです。

澤野先生が最後の方に，他の地域や災害後にも活用できるモデルになるのではないかと書いてくださっています。私たちだからできたこともあれば，普遍的にできることもある。スタート時に思っていたことは，それぞれが自分の得意分野や好きなことを介在させて現地の人たちと関係を持つところから何かが始まり，現地のベターメント，より良い未来を一緒に模索していくということです。私たちのチームメンバーの得意なこと，好きなことでこのプロジェクトは構成されていますが，他のチームであれば別の内容で構成することができると思います。モデル化までもっていかなければいけませんね。

小さな物語の響き合いを目指して

最初に，川野先生のコメントを読んで面白かったのは，タイトルにも入っていますが，「はじめに」

で展開される「眠れなかった」川野先生の物語です。たくさんの方が語ってくださった物語を聞いた私が語り、それを読んだ聞き手の物語が始まるというように、次々と連鎖していくストーリーの展開のプロセスが見えたようで嬉しく思いました。また、川野先生の、仕事として続けた活動であるから、職を変われれば継続されないと考えていたというのを読んで、私自身は、このプロジェクトを職業として、仕事としてやろうと思っていたいなかった、個人としての私がやろうと思ったのだということに気づきました。始める時、多くの場合、予算は1年単位なので、予算が取れなくても、自費で、割り勘で十年やりましょうという約束をメンバーに取り付けました。結果的に、院生教育を含めた仕事として続けてこれたことは幸運なことだったと思っています。

2番目に、「被災地物語」は被災者が語ることを連想させるという部分について。このプロジェクトでは、当事者性、もしくは距離感の問題について、被災者とそうではない者の二分ではなく、それぞれが距離のグラデーションを持って当事者としてあり得ることを想定しています。現地に足を運び、人々と顔の見える関係を結び、関係を維持するなかで、距離が縮まっていく。そうすることで、災害を消費したり、忘却したりするのではなく、自分の問題として引き受けていくことになる。被災者が語る、非被災者が語るという話ではなく、当事者としての外部者が当事者性を強めながら語るのだと思っています。もちろん中核にいる人たちにとって代わることはできないのですが、外側にいる人が被災を我が事として捉えるための仕掛けを作ったつもりでした。対人援助学マガジンに連載しているプロジェクトの記録には、「周辺からの記憶」というタイトルをつけています。

3番目の、とにかくゴチャゴチャといろんな形の物語があって、よくわからない、全体を捉える大きな図式が知りたいというコメントに対して。川野先生が表現してくださっていますが、「物語を響かせ合う形式」というのを目指してきました。2015年の中間報告¹⁾で書きましたが、人々の被災と復興の物

語を一枚岩の大きな物語に収束させるのではなく、もっと複雑で繊細で奥深い小さな物語を多声的に記述していくことを目指したいと思っています。今回は私一人によるショートストーリーですが、そこに現地の人々の多様な声が響き合っているといいなと思います。いずれは、他のメンバーによるストーリーと合わせることで、もっとたくさんの方のハーモニーが聞こえてくるのではないかと。そういう意味において、このプロジェクトは、全体を捉える大きな図式を拒否してもいます。そのことがもたらすわからなさを含むものこそ、人生を表していると思うからです。それを研究という形で表現していく矛盾を抱えながら努力しているところです。

4番目、オリジナルな体験者が、「それは私ではない、それは私についての物語ではない」とクレームを申し立てるといふことはあり得ることでしょうし、あってよいと考えます。本論にも書きましたが、語り手と聞き手はどこまでも越えられない溝を抱えざるを得ないことを認め、苦渋と無力感とともにそれを引き受けることが前提です。結局のところ、それが他者との出会いということではないでしょうか。そこには、物語を聞いて、語り直した者が引き受ける責任があり、異議申し立てによって、新たな関係と理解が開けていくことを期待します。いつ、どこで、誰と競争するか、それは逆に不適切な物語の語り方があることを逆照射しているはずであるというコメントに対して、誰と競争するのか、適切な物語の語り方ということは、とりもなおさずポリティカルであり、語り手のポジショナリティを示すと考えます。一番それを感じるのは放射線被害についてですね。私自身が自分の立ち位置について言い得ることは、国家や社会の動向、大きな物語に呑み込まれてしまわない小さな物語、抵抗の物語を大切にしたいということです。

それから5番目、語られないこと、直接関われなかった人との共有、物語の蓄積と情報化の課題について。このところは適切に理解したかわからないのですが、今、まさに努力しているものです。証人として10年の成果をどう発信していくか、いろいろな形で、研究としても、それ以外でも発信していきたいと取り組んでいます。

1) 村本邦子 (2015) 「臨地の対人援助学—『東日本・家族応援プロジェクト』から見る東日本大震災の復興の物語」村本邦子, 中村正, 荒木穂積 (『臨地の対人援助学』晃洋書房 1-8 頁

科学としての対人援助学

6番目に、作業仮説の検証についてのコメントがありました。従来の医療モデル、個人モデルではないコミュニティ支援の効果の確認と提示については、川野先生ご自身がご自分で問われて、ご自分で応えてくださっているようにも見えます。「連続するプロセスにおいて了解と発見を紡ぎ、検証を局所的に承認する、現象と理論の積み上げを前提とする科学、継続自体を本質とする記述モデルが必要とされる」と。中村さんはいつも、「このような研究を何学と置くか」と問いますが、振り返ってみると、2015年に出版した「臨地の対人援助学」というのが最も近いものではないかと思っています。だからこそ、この特集は対人援助学会に提示することにしました。

対人援助学というディシプリンが成立するかどうかについての疑念、するかもしれないし、しないかもしれない、成立させるとすればまだまだやるべき作業が多くあるということ、『対人援助学の到達点』で書き²⁾、試行錯誤を続けています。斎藤先生が今回執筆されたスピノフ企画「未来のための思い出・ココロ重なるプロジェクト」も、その努力のひとつでした。団先生の漫画展がいったいどういうメカニズムで人々の心に物語を生み出すのかを研究してみようということやプロジェクトでもあるんですね。

ここで目指している大きな全体の枠組みを拒否しながら、しかしそれを研究として成り立たせるためには、つまりそれを科学として成立させるためには、ここで成された研究に他の研究者がアクセスしたり、追試したり、批判したり、発展させることに開かれなければいけない。ただし対人援助学の主役は当事者であると言っているわけですから、その科学はアカデミックに特権的なものであってはならず、当事者が対話に参入可能なものでなければなりません。コミュニティ心理学のケリーが言っていること

ですが³⁾、科学を志しながら多様な価値観を含む生態学的視点を保つことは、往々にして相矛盾し、創造的に克服される必要がある。科学を追求しすぎれば、数字で測りやすいもののみが取り出される傾向が強まり、対人援助学のコア概念から離れていく危険性がある。ケリーは、歴史的に唯一絶対の妥当な方法論があったことは一度もなく、さまざまな研究方法の生態学的妥当性について議論し、型破りの興味や異端の研究方法を採用する研究者たちのソーシャルサポートシステムを作ることを推奨しています。そういう意味で、対人援助学会が発行している、対人援助学マガジンというのは一般の人々との対話に開かれており、貴重な資源と言えるかもしれません。

システム論におけるスピノフと良き変化

団先生が『対人援助学の到達点』でスピノフについて書いていますが⁴⁾、これは、対人援助学にとってひとつの有効な概念ではないかと思っています。わかりやすい形で効果検証をするためには、目標を絞って、そのために邁進し、結果を検証する。それは因果論です。しかし、実際には、自分のしていることがどういうふうにならぬかについて、どんな展開をするか、簡単にわかるものではなく、現実には錯綜して構成されていると考えるのがシステム論であると。人々の暮らしが何から影響を受け、どうなっていくかは不確定だし、少しでも良い方向に流れが形成されるよう、今できることをしておくのがシステム論者である。自分の関わる場にスピノフの良き出来事が生まれていたら、それをもってその働きかけを是とするとまとめています。

私自身も、「ラボとしての起業」と命名しましたが、二十数年、現場で事業を展開してきました。いろいろなプロジェクトを実施してきた経験から、この考え方に賛同します。物事がうまくいっている場合、不思議な偶然が次々と起こって、プロジェクトに弾み

2) 村本邦子 (2013) 「対人援助学の学びをつくる～"reflexibility"をキーワード」望月昭, 村本邦子, 土田宣明, 徳田完二, 春日井敏之『対人援助学の到達点』53-66頁

3) Kelly, J. G. (2003) による "Science and Community Psychology: Social Norms for Pluralistic Inquiry" (*American Journal of Community Psychology*, Vol.31, p. 213-217)

4) 団士郎 (2013) 「社会システムの中の融合と連携～臨床現場と大学院の循環」望月昭, 村本邦子, 土田宣明, 徳田完二, 春日井敏之『対人援助学の到達点』21-36頁

がつく。継続とともに、当初は想定していなかった思わぬ副産物が豊かに生まれてくる。本プロジェクトは、ずっとこのようなものであり続けています。プロジェクトの背後で起こってきた縁起、すなわちご縁のネットワークが次々と展開していく様は目を見張るものがあり、大災害というのは人々の関係を破壊し、切断する一方で、新たな出会いを生み、切断に抵抗し、関係を修復しようとする人々の力を引き出す契機となり得る。これは未来への備えにもなると考えています。

このスピノフ企画では、3つの問いから成るインタビューを実施したのですが、齋藤先生が1番目のものを分析してくれていて、2と3については、学会発表はしましたが、まだペーパーにしていなかったので、そういうこともしていかなければいけないと思っています。

それでは、次に団先生からレスポンスをお願いします。

寿命百年の生物の通俗性

団 私は今回、漫画作家であることをとても強く意識して書いています。むろん、漫画家ではない私というのが特別にあるわけでもないんですが、そういう人間が、いただいたそれぞれのレスポンスを読みながら、思ったことを話します。ですから書いておられることへの直接的な見解ではなくなるかもしれません。

澤野さんの書いておられることを読んで目についたのは脆弱性という言葉が出てくることです。最近、いろんな災害が繰り返され、東日本大震災のあとにもまた、新たな災害がいくつもありました。その時、何らかの形で社会や世論は動きます。組織的な支援とか、あるいは素朴に力になりたいという、そういうエネルギーは世の中にいつも生まれていると思うんです。

しかしその多くは、結果的に一過性と言われても致し方ないような運命をたどるのも、みんな知っていることです。誰かに大きな困難が起きた時、助けたいと思い、力になりたいと思ったにも関わらず、結果的に一過性だったと言われるような飽和状態

が、それも比較的早くに起きてしまうのはなぜなのかということですね。早く起こる飽和状態を狙って次の災害が用意されているのかと思うくらい、次から次とネタには困らない社会のメカニズムを現実として知っています。

元に戻りたいという潜在的な欲望は、被災者、当事者にも、自分は直接渦中に居るわけではない人たちにも、共通してあるのかなと思います。時間は前にしか進んでいないのに、昔のように戻りたいとか、元に戻りたいと願ってしまう、この通俗性。何か悪いことが起こった人は、悪いことが起こる前には自分は幸せだったと思いたいんだろけれども、実際は、過去は過去でいろいろ課題はあったわけです。だから人はいつでも、様々な課題を抱えながら次のステージ、人生の未来に向かうのだと考えることができれば、「昔は良かった」なんて繰り返されてきた一歩も進まない通俗的感想のところでも留まったりはしないのだけれど。

そこをわれわれの社会全体が分れないから、助けてもらいたいと思った人は、社会の無関心、無責任、あるいは社会の飽和状態による忘却に晒されてがっかりするし、逆に援助を考えていた人は、思ったほど充実させて継続することはできないんだという自分がかかりしながら、自責の念を持ってまた次のものに出会う。そしてまたそこで以前同様に、それなりの情緒は発動するという繰り返し・・・。

それを支えている我々はみんな、自分が百年ぐらいしか生きられないことを知っている。その百年の中で、自分がなにがしかの機能をできる時間は、さらに短いことをわかって生きている。そんな落としたところで一人の人生は終わってしまうから、次にまた似たような人が現れても、同じようなことを思い、結局、前の人より深まる事もない。百年ぐらいの寿命の生きものが、それなりに成熟すると、こんなことに遭遇すると、こんなことを思って、こんなことを感じている内に寿命が来る、なんて繰り返すのかなと、今まで思ったことはなかったのですが、今回、澤野さんのものを読んで思いました。こういう事って、確かにあるかもしれないなあというのは、私にとって面白く、従来思いついていたこととはちょっと違う着想でした。

そこと直接はつながらないんですけども、そういうところで手が打てるのが、結局、最終的には商業主義というか、お金なのかなと思います。東北に行って、建設中のものすごい堤防なんか見ていると、防災というよりも、これにどのくらい金を突っ込んでいるのかというのがものすごく見えますから、その方が説得力があるのかなと思ったりして……。防災として説得力があるのではなく、これだけ金を使っているんだということは、それなりに見せているものがあるなど、そんなことも思いました。

対人援助を志す人々の繊細さと脆弱性

それから、川野さんの文章を読んでいて思ったことは、続けて読んだので共通しているところもあるかと思うんですけど。先ほど村本さんの話の中にあった、誰かの物語を聞く時に、このこともまたずっと昔から考えているテーマでもあるんですが、まず誰がこういう被災のことに関心を持って聞くのか？ということですよ。

けっして市民社会の平均的な人たちがみんな聞きにしているわけではない。だいたい聞きに行く人は、いつも聞きに行くという感じがある。では誰が行っているのかと考えると、職業選択としてカウンセラーとか、対人援助職をしている人たち。つまり、こういうシンパシーが働きやすい人だと思えます。でもそういう人たちって、生きものとしてどこか繊細で、ある種の脆弱性を持っている人やなあと思うのです。

ところが被災した人たちは全員がそんな人たちではない。するといろんなタイプの人が被災しているところに、あるタイプの人たちが入っていくということで起こるメカニズムというのがパターン化するみたいなことは、ずっと繰り返してきたのだろうなという感じがします。それは前にも思ったことがないわけではないんですけども、川野さんの読みながら、あらためてその通俗性というか、そういう通俗でこの分野の学問というか、この分野の共通の、何かこう、お互いの良きことの認識が作られている。

その弱点というのがあるなということは見破った上で、次に何を？という風にならないと、善

良さとか優しさというようなことでは限界がある。ドライに言えば、堤防を建てる以外にやれることがあるとしたら、あの巨大なコンクリート建造物に負けないくらいの人間としての強さがあるのに、そこにとっても繊細な人ばかりが心で動いてしまうという……。そのことが持っている弱さみたいなものの共感、ヒューマンサービスの中に不必要なものではないけれども、それがずうっと前面に出ていて繰り返されているのは、実はそこがテーマなのだろうなど、あらためて思い直したりしました。

この世界で生きる誰かの物語が持つ普遍性

それからどこかを読んでいて思ったんですけども、物語で漫画……。これは漫画家である自分が思ったんですけども、私の描いているあの漫画にも、被災地のことは書いていないけれども、あの漫画に出てくる人たちはそれぞれみんなモデルがあるわけで、完全なフィクションではないわけです。すると当事者、ご本人は「これ、私のことですね」と言うことができる。それはほとんどの場合は当たっていて、「あなたのことをモデルにして描いたんです」ということになるんですけども、それは漫画家の私の中では当然のことです。

例えば小説に出てくる登場人物が、想像の人物であるからというので、どこにもいないような人だったら、そんなものはそれこそマンガにもならない、何のリアリティもないという感じになってしまう……。そういう意味で、物語に登場する人はむしろ、全部私のものであったり、全部私の身近な人であるというのが物語の優れたところだと思う。事件の渦中にいるとか、自分が当事者になるということが、その人の独自性とか、その人の専有性を保証したりしていないと作者としては思ったりしました。

むしろ、この世界の物語は誰かの個人的体験であったとしても、それが誰かの物語なのではなく、今日社会に生きる人間の、多かれ少なかれ普遍性を持った物語だと思います。

という風に、これは漫画家の私が、自分が描いているもののことを振り返って思ったことなんですけ

れども。何て言うのかな、ここに書いてある、要するに「それは私についての物語ではない」という苦情を申し立てることが、どういう意味で書かれているのか、私にはもうひとつわかっていないところもあるんですけども、そんなことには特に論点はなからうというのが、私の漫画を描いているスタンスだなということが、ここからちょっと感じられました。それぐらいで置いておきます。

村本 では齋藤先生、お願いします。

団先生の漫画展が機能するのは何故なのか

齋藤 どうもていねいなコメントをありがとうございます。いろいろ触発されました。私の今回の研究については、かなり個人的な背景も含めてお話させてもらったのかなと思います。私自身は、このプロジェクトには、こちらへ来て大分経ってから参加させていただいたので、詳しいことは全く知らなかったのです。現地へも一度も行っていません。そういう意味で、まさに臨地ではないんですね、地面に足がついていないわけです。

でもその中で、今回の研究のテーマをうかがったり、一部具体的なことをうかがったりするうちに、非常に不思議に思ったのは、団先生の漫画展が中核にあってそれが間違いなく機能しているという感じがしたのです。でもそれを説明しようとすると非常に難しいと感じました。物語の同型性というシステム論的なつながりで一応説明はできるけれども、実感を持ってそうだと言えるものではないのです。この研究はある意味、京都という全く被災地とは別のところの駅で、偶然通りかかった人にインタビューをして、しかもそのインタビューも本当に短い人だと3分くらいのインタビューで、かつ、質問も「感想を聞かせてください」という質問だけ取り出すというふうに、ある意味非常に極端な研究デザインだったわけです。

普通なら重層性とか、緊密な関係性などが得られないだろうと思われるような設定の研究だったので、逆に非常に興味を感じました。その中でいったい何が起きているのか。その人たちが体験してい

ることを、理論的にはなくてボトムアップで丁寧に見ていくと、何かその謎が解けるのではないかと、いう直観がありました。当然、私という研究者の先入観がそこにはものすごく入っています。むしろそれは排除しない。私の興味や関心がもろにセオリーを作る時に影響を与えるのは覚悟の上で研究する。しかしそうは言ってもデータとそれがうまく重なってなければセオリーは浮かび上がってこないわけです。そこでかなりやっつけ仕事ではあるのですが、集中的に時間を使ってデータを解析させていただいたところ、やっぱり「ああ、なるほど」というようなものが浮かび上がってきました。それは、物語の持つ中間的な性質と呼べるようなものでした。つまり、非常に地に足がついたものであるにも関わらず、ある意味、ものすごく地面から離れているわけです。その中間のところに物語という媒体があって、だからこそ両方にアクセスできる。そういう感じが浮かび上がってきました。これがやっぱりすごく大きい。大きいというのは、だから物語が万能だというわけではありません。しかしこういう活動というのは、下手をすると抽象的な理論と、本当に現場で足にいた人にしか主張できないような生のものと乖離する傾向があるわけです。ある意味、極端でないとい何とも言えなくなる。しかしそうではなくて、もっと中間的で多様なものが、そういうものを全部つないでいくような働きをしているのではないかと思います。

だから団先生のお話、例えば「ふるさと」ですね。これはちょうど今回の特集論文に実物が載るので読者にも伝わると思うのですが、震災とは何の関係もないストーリーなのに、あれを見ていると涙が出るんです。なぜ通りがかりの人が涙を流すかということ、そこには普遍性があるという言い方もできるけれども、ある意味ではもっとローカルと言いますか、本当に小さいものですね。実はあのストーリーは私も演習によく使わせていただいているんですが、やっぱりその人の体験と共鳴するのです。それと同時に、今現在われわれが置かれている大きな文化とか、文化の流れなんかとも結びついて、すべての人が感動するわけではないにしても、生ずる時にはすごい感動が生ずるんですね。そういう形で結びついている

ような機能が、やはりこういう震災プロジェクトというすごくスケールは大きいけれども非常にデリケートな、そういうプラクシスの中で働いているということをすごく強く感じました。それが今回の研究の分析結果を書かせてもらった時に感じた正直なところですよ。

いつも近くにいながら直接支援に行かない 自分の落としどころ

その背景には、実は私個人が、本当に地に足がついた災害の支援経験をほとんどしていないという事実があります。いつもすぐ近くにいるけれども通りすぎるといふ感じなのです。私は新潟県出身なので、子どもの時から、新潟の大震災もすぐ近くでありましたし、水害も何度もありましたし、年をとってから中越の地震もあったし、この3.11の時は、ちょうど津波が来た時はその上を飛行機で飛んでいたのです。北海道で講演を頼まれた翌日に飛行機で戻ってくる時に、飛び立った時にはそのニュースは全くなかったのが、着いてみたらあの大災害が起こっていたのです。恵まれていると言えは恵まれていたわけです。今年も、北摂地区の地震の時もまさにそれで、あと15分くらいずれていればまさに最中にここにいたんですけれども、少し時間がずれていたんで、私自身は何も被害を受けませんでした。それで、正直言うとやっぱりちょっと微妙な気持ちになるのです。

運が良かっただけとは言い切れない、何か罪悪感みたいなものにつながってきて、しかもそこに直接支援に行けないというよりも、行かないということに対する自分の落としどころがうまくつかめないという感じがありました。そういう意味で今回の研究はそれを自分の中でつなぐひとつの作業だったということを感じます。さらにこれとは直接関係はないんですが、最近はその時に本当に一人ひとりが何を体験しているのかが、リアルタイムでツイッターなんかでわかる時代になってきているのです。

その時に起こっていることというのは、通り過ぎていくことです。本当に大被害に遭った人でなければ本当に通り過ぎるわけですよ。その時は一晩眠

れなかったとか、ちょっとした情報でもものすごく不安になったとか、あるいは過去の体験や友人のことを思い出したりとか。富山は3.11では全く何の被害もなかったんですが、その直前にニュージーランドの事件があって、それで同級生が死んでいるという子がいて、ニュースを見た時にものすごく不安定になって、夢にまで出てくるというような語りを聞いたということがありました。その子の中では、富山という安全な地にいるのに、東北とニュージーランドとつながってしまう。実際に安全なところにいるわれわれは、こういうことをどう考えるのかということ、どんな立場にいても、それがどんな形であっても、第三者から見ればあなたは被害を受けていないじゃないとか、安全なところにいるのに何を言っているんだ、みたいに言われるような時にも、そういう深いところで津波とか地震は起こっている。

物語の力を信頼する

そういうことを感じているので、そういう意味で川野先生のご質問に少し結びつけていくと、やはり多様性という言葉では単純になってしまいがちですけども、要するにありとあらゆることが起こり得る。その中では本当に、まさに、そんなものは被害でも何でもないと立場でいる人でさえも、それはつながってくる。そういうものにうまく機能するというのが、こういう非常に中間的な、しかし体と心と両方を巻き込んで、場合によっては夢にさえ出てくるような、そういうものを触媒するようなもの、それがこういう多様な物語なのではないかと思うのです。

川野先生が適切に指摘してくれたように、今回の特集の物語の多様性というのは、視点も違えば語り方も違い、だれがどういう形でこの物語を作っているか、プロダクトも全部違うわけですよ。だれの視点、主語で書いているか、どのくらいの具体性で書いているか、そこにどの程度理論みたいなものを取りこんでいるのか、一つひとつみんな違って、私はこの多様性はすごく大事だと思っています。そういう意味では私の論文自体はその中でスペクトラムで言えば端のほうにあるわけですよ。真ん中にはないわ

けです。

だけどそういうところがこのプロジェクトに意味のある物語であって、だから物語を中心に置くというのはまさにその多様性を受け入れることです。そうなってくると、でも、じゃあ、何でもいいのかという疑問が次にくるわけで、それがまた川野先生の次の指摘になるわけですね。たしかに非常に助けになるもの、あるいは士気を高めるもの、いわゆるモラルなものはまちがいなくあるんだけど、でもその物語が働いたせいでさらに傷つく人がいるかもしれない。

あるいは、「あなたのは大したことないよ」って、排除になってしまうような物語が語られることももちろんあるわけです。それをわれわれはどう考えるのか。結論から言うと、川野先生がここにすでに書いてくださっているように、多様なものを重ね合わせていって、物語そのものの力を信頼するということだと思います。多少どっちかへずれても、最終的にはそれが物語の力だということだと思います。できるだけ語りを制限しない。悪い物語というのはむしろ力があるので、無視されることはないんですけど、取るに足らない物語というのは危ないわけです。あるいは、これってどこかから借りてきた物語じゃないの、みたいなとか、そういうものが無視されやすいわけです。できる範囲は限られていて、全く平等にというのは絶対に無理なので、無理だということを自覚した上で、どんな物語にも注目していく。それが大事なんじゃないかなというふうに思うわけです。それを川野先生は、実は結論をここに書いてくださっているので、全くそのとおりなんです。物語の継続性を信頼する。検証はたしかに必要だけでも、検証というのは常に仮説をより良いものにするための検証であるというのが物語の考え方であって、決して検証で結論を出すものではないわけです。

プラクティカルサイエンスとしての検証

常に物語は理解の途上にあるわけですから、その流動性も含めてそこに価値を生み出していく。絶対的な価値ではないけれども、少なくともより良いもの

のを目指していく、みたいな活動を保証するのがこういう研究の、まさに中核であって、それが私の言葉で言えば実践科学、ハードサイエンスではなくてプラクティカルサイエンスだということになります。プラクティスというものが、われわれが生きている世界なわけですから、絶対的に複雑であって、しかも不確定のものであって、何が起こるかわからなくて、その中でも何かより良いものを作りだして、もし一般化できるものであればしていきたいということを常に追求する。それがプラクティカルサイエンスなので、まさにそれが、川野先生がおっしゃっていたことではないかと思います。

だからやっぱりこの物語はまずいよ、っていうのは、出現するのもある意味では仕方なくて、明らかに悪いものは何としても止めなければならない時ってやっぱりあると思うんですけども、それはできるだけ最小限にして、とにかく語り合うこと、あるいは語りを重ねることのエフェクトと言いますか、それを信頼する、みたいなことが1つの答えなのかなと思います。

ですから澤野先生のご指摘のアクティブ・インタビューにおいても、聞き取るほうもインタビューの当事者なわけで、そこにあるものをただスポンと聞き取って記述するものではない。このことはこの世界ではもう常識になっているわけですが、やっぱり非常に大事なことだと思います。ある種の良い物語がだれかの頭の中にあって、それを採取してくるということでは全然ない。どんな場面であってもそこに交流が生じているのであれば、たとえ、そこにいる2人が全くの当事者とは普通はみなされないような人であっても、あるいは全然別の場であっても、そういう語りが交差する時にそこで浮かび上がったものはとにかく全部大事にしていきたいというような、そういうプロジェクトになっているなという感じがこれに関わった時にありました。

逆に言えば、なぜうまくいっているんだろうというのがひとつの研究の視点になると思います。それをできるだけ第三者に伝わるように発信する。正直言うと、このプロジェクトってちょっと常識はずれなところがあります。現場に行かずに京都で漫画展をやって、それを研究するなんていうのは、ある意

味、「本当に何をやっているの?」ということになりかねないので、それに対して、「いやいや、それは、やっている方々にとってはわかっていることで、でもあなた方にはとても理解できないでしょうが、私はこの中間ぐらいのところを説明しましょう」みたいなことはやっぱり必要だろうなという気はするんです。

またそういう形で論文が役に立てばと思います。もともと実践研究ですし、仮説生成と仮説の提言が目的なので、検証ということを厳密に言い出すと、もうボロはいくらでもあるわけですよ。だからと言っていい加減にやるのではなく、大きなサイクルの中の、ある一部分に焦点をあてて、方法論を丁寧に適用しながら複数の論文を作っていく、というのがわれわれの責任なのかなと思います。

村本 ありがとうございます。では鶴野先生。

「防災エリート」になってはいけない

鶴野 2015年に村本さんたちと『臨地の対人援助学』を出した後、何人かの方からいただいたコメントの中に、「これはだれに向けて発信しているものなんですかね」というものがありました。また「カタカナが多すぎる」とも…。「私には少なくとも、自分に向けて書かれているとは思えなかった」って。その方は福島出身で現在は東京に住んでおられる方なんですけれども、そういうふうなことを言われて、その時から思っていることなんです。今回、澤野先生がコメントの中で紹介してくださった『東日本大震災の人類学』という本を読んで、同じようなことを思いました。「だれに向けてこれを書くのか、そして発信するのか」ということを。

この問題を考える時に参考になると思っているのは、川島秀一という民俗学者の言葉です。川島先生は気仙沼の方で、現在は東北大学の先生ですけれども、長らく漁撈の研究をしてこられて、気仙沼のリアスアーク美術館の館長もされた方なんです。お母様を今回の震災で亡くされました。その川島先生が最近書かれた論文（「災害伝承と死者供養」、日本口承文芸学会編『こえのことばの現在 口承文芸の

歩みと展望』三弥井書店 2017年所収）の中で、「防災エリート」になってはいけないということをおっしゃられて、もしかしたら、意識はしていなかったにせよ、『臨地の対人援助学』も「防災エリート」の発言として読まれたきらいはあるかなあというふうに思うわけです。

先ほど、団先生がおっしゃった、「ナイーブな、あるいは繊細な感覚を持った人たち」が現場に入って、支援活動を行い、そしてさまざまな形で表現する、そのところにもつながっていく。本人は意識していないけれども、どこかで自分は「防災エリート」になってはいけないかということに危惧する感覚というのを大事にしないといけないんじゃないかなと思ったんです。それに対して川島先生がおっしゃっているのは、当事者によって黙って生きられている文化、あるいは当事者によって黙って生きられてきた記憶というものを大事にしたい、ということで、もしかしたら自分が目指しているのも、ずっと年に1回東北へ通ってやってこようとしてきたことも、そういうことなんだと、あるいはそうであってほしいなというふうなことを思っています。

物語の中間的性質がもたらす 葛藤や曖昧さへの自覚

それから川野先生が作ってくださった表を拝見して、「なるほどなあ」と…、自分の中でもクリアになって、とても参考になりました。先生のコメントの後半のところ、「論文を通してどこまで作業仮説が検証されたと受け止めてよいのか。例えば鶴野論文では、山元民話の会員の事例において、民話を語り継ぐことへの強い使命感と責任感を呼び起こされた住民のエピソードから、民話活動によってアイデンティティが確認されて、町民たちにレジリエンスが生起されたとしている。しかしアイデンティティの確認とはどのようなことなのか、それに支えられているという文化的多様性、さらに、それによって発揮されたレジリエンスの姿を十分に読み取ることが筆者にはできない」というコメントをいただいておりますが、先生のおっしゃるとおりなんです。つまり、山元民話の会の人たちが、会の活動を通して、

自分たちは山元町で生まれ育ったというアイデンティティを確認したということは確かにあると思うんですけど、その感覚、意識自体もずうっと継続して維持されているものではなくて、民話の会のメンバーそれぞれの中でも強まったり、弱まったりしていると思いますし、ましてや、民話の会に入っていない人たちにとっては、民話の会によって作られた「震災の記録」を読むことがアイデンティティの確認や維持に寄与しているかというのでしょうか。

おそらく、この本を読まれた時には多くの方が、「ああ、こうして生きていることはありがたいことだ」とか「確かにそうだな」というふうに思われたでしょう。でも、また何日か、あるいは何か月か過ぎたら落ち込むという、その繰り返しだろうと思うので、そこはとても難しい。アイデンティティというものに物語が継続して寄与できるかどうかというのは、はっきり言ってそんなにきれいごとではないということをおもっています。

自分の中で、まとめたいという願望と、まとめられないという思いとの葛藤みたいなものが常にあって、それは斎藤先生が先ほどおっしゃった、物語の持つ中間的性格とも結びついていると思うんですね。つまり、現実に着地するというのと、それから現実から離脱するという、両方が物語というものの持つ本質的な属性なんじゃないかと思います。昔話の語り手もやはりそういうところがあって、だからこそ、継続して新たな物語を紡いでいくという作業も必要になっていくだろうと思うんですが、それと同時にやっぱり、もどかしさとか、葛藤とか、あいまいさというものへの自覚ということが、常にわれわれには求められているんだろうなというふうに感じています。

村本 ありがとうございます。では、中村先生。

公共の両義性について

中村 ありがとうございます。澤野さんのコメントについてです。人類学と社会学は結構近いところにいるのでよくわかる問題提起です。コメントの最

初のほうに脆弱性の話が出てきました。また公共の人類学もそうなんですけれども、社会的な発想とずいぶん重なります。脆弱性の構築性、住民の主体性の重視等、結構、理論的なことも親近感のあるアプローチですね。

2018年の秋、社会病理学会という学会の研究担当理事をしていて大会を組織しました。その一つのテーマが「公共の社会学と社会問題・社会病理」についてでした。社会病理学は社会学の一分野ですが、公共のもつ両義性を視野にいれた議論をしたのです。とくに「公共の福祉」の名の下に理不尽なことがまかりとおります。社会病理なので規範性そのものが射程には入りません。その言葉は憲法に書いてあるのです。「公共の福祉」は便利のよい言葉です。公共性が持つ抑圧性とか、暴力性とかを意識したのです。最近では優生思想による強制不妊化治療の問題があったので、それも扱いました。何が社会病理なのかきちんと把握すべきだという問題提起です。ハンセン病者隔離問題も同じです。相模原での障がい者施設での殺傷事件もありました。枚挙に暇がないほどに、公共の問題性を考える話題が社会病理のなかにあります。同じ事は復興過程でもあるはずで、震災対策という公共性の名のもとに展開されている理不尽なこと、不合理なこと、抑圧的なことを指弾しなければならない課題もあるでしょう。公共性について澤野さんコメントから、臨地という場合に視野に入れるべきことを考えました。また別のテーマへの類推ですが、ここに重ねて言うと、「環境的正義（あるいは公正）」という考え方があって、いろんな脆弱性が作られていく面を指摘することができる考え方です。「環境的正義」は臨地の臨床を考えるうえでも参考になるなと感じました。被災は自然に起こるのですが、人為的なものがあります。社会的、歴史的、文化的な脆弱性とともに関与する点を視野に入れます。

例えば、世界的には先住民族の持っている環境の問題、例えばネイティブアメリカンの地域で被爆実験、原爆実験が行われるとかもあります。電力使用の大きな都会には原発をつくりません。地方に立地します。沖縄の基地問題も同じです。いろんな意味で環境の不正義さを指摘し、地方に脆弱性が作られ

ていって、基地とか公害とか差別とか、脆弱さは全部そういう環境的な不正義と関連していると考えられると、原発という複合災害だったことにも典型的な点がテーマ化できます。公共の名の下にいくつかの地域の環境的不正義がそもそも開発のもつ、復興のもつ別の意味での弱さあるいは抑圧性を構築しているのだなと思いました。そうしたことを考えながら、澤野さんのコメントを読みました。

ローカルなものとしての対抗

臨地の思想とこれらの諸点は重なります。ローカルなものの理解ということにもつながります。川野さんもどこかで書かれていたけれども、ローカルな知識や実践の持つとらえ返しとして、環境の不正義のなかを生きることになり、自然災害と人災がかさなりながら苦悩が生起して、そこを、ローカルなものの力を用いながら再生していく、ローカルなものに埋め込まれている苦悩の記憶と再生の力のようなものが地域と協働するとみえてくる、そんな視点を大事にしたいと思わせてくれたのがこのプロジェクトです。そこにうまく光を当てられたらいいなと思っています。それで、今年はまだまたいろんな災害があったので、私は三重県の伊勢志摩の出身なんですけれども、いろんなことがあるたびに、85歳の母に、元気で一人暮らしをして生きているので、台風のたびに電話をすると、母の基準は「伊勢湾台風」なんです。伊勢湾台風は昭和34年、私が1歳の頃で、私を背負って逃げ回ったというのです。相当に大変だったといいます。昭和30年代はまだまだ脆弱な戦争からの復興途上だと思っています。そうした体験のある人たちは歴史として被災を生き延びてきた人たちです。強いなと思います。ものすごく。こっちで相当吹き荒れた嵐の中でも母は、伊勢湾台風の被害を基準に、今ほど家ががっちりしているわけでもなく、その中を生き延びたという母の記憶が、私にとってはとても強く母に根付いているなと思って、こっちが逆に励まされて、「京都はどうや？」とか言われて。昭和30年代のその被災というのは相当なものだったと思うんですけれども、そこを起点に考えて生きている85歳の母のレジリエンスみたいなもの

のとか、それからそこで母の記憶をたどると、地域の人たちが支え合っているいろいろな励まし合っていて生きてきたという経過もあって、地域にもものすごく愛着を持っているのです。近くに親戚もいますが、今一人暮らしをしているのですが、そういうレジリエンス、何かしらの被災とともにある家族の歴史、そして母の歴史とか、それから地域の被災の歴史とかと重なったりします。何の被災や困難もない地域はありえないでしょう。家族や個人はもちろん何らかの被災や困難を抱えますが、地域の被災は共同記憶として、または多様な文化として蓄積されているのを感じます。証人はすでに被災地域の共同主観のなかに語りの文化や芸術や儀礼や祭りとして重層化しているのだと思います。

そうやって振り返っていくと、伊勢、鳥羽、志摩あたりは海とともに生きているので、そこで語られている伝統芸能とかには被災の物語がずいぶん重ねられています。海の地域なので、海難事故も含めて悲惨さはかなりあります。すると、伝統芸能とか、それは私の幼い時から体験してきた祭りだったりすることと重なっていると思います。記憶として幼い頃の体験をとおして刻み込まれていくのです。このプロジェクトをやりながら先鋭化してきた意識でもあるんですね。それはすでに証人のようにして地域の文化を生きることによって内面化されているのだと気づいた次第です。

そういうようなことも思い出されるとすると、いろんな意味で、それは東北の人たちの今回の、支援者支援もそうなんですけれども、地元の人たちに根付いたというか、そこの息吹きというか、脆弱性は地域に、地方にしわ寄せされるんですけれども、そこから得られているものと重なって臨地の思想として学べるなと思っています。多層的な意味で、公共の社会学や社会問題を語る際に、一方で澤野さんが指摘してくれたあたりが重なってきたんですね。

それともうひとつ、暴力の臨床社会学について研究をしていることとかかわるテーマがあります。震災のあとにDVホットラインとか、虐待ホットラインを全国に転送してボランティア活動をした人たちの話です。非常時にこそ発生しやすくなる暴力やいじめについてのホットラインを作る時に全国の仲間

電話を転送したのです。その活動を総括したのですが、苦情のようなものもあります。それは言葉の問題です。たとえば関西の方言で相談にのるとやはり話しにくいというのです。そのまま転送されてくるのでしょうがない面もあるんですけども。

そうして考えると、やはり地元の言葉で電話を取ることの重みとか、言葉が持っている力を感じます。相談もどんな言葉で受けるのかという点では地元の言葉で相談した方がいいですよ。カウンセリング言語論とか正面から議論すべきでしょうね。東北の人たちが使っている言葉で電話を取るといって、そういう日常がものすごく大事だなということを感じます。ですからまずは言葉です、文化です。どんなローカルな知識の中で支援や対話があるのかということを考えます。このプロジェクトでも同じです。遠くから言葉も違うひとたちがやってきて、どんな言葉で話をしながら記憶を共有していくのかです。これはひとつのエピソードですけども、そういうことも感じたりして、主体的であるということの意味はいろんな次元がたくさんあるなと思ったりして重ねて考えたということです。

本プロジェクトのアカデミアへの貢献について

川野さんが眠れなかったというあたり、川野さんの支援に対する感受性がよく伝わってきました。川野さんのコメントで一番感じたのは、最後のほうの研究手法の点です。これはいったいどういうアカデミアへの貢献があるのかなという点です。そこで考えたのは、「アブダクション」のことなんです。帰納法でもなく、演繹法的でもない方法論のことです。とても川野さんらしい言い方で、「現場において他者と出会い、向き合って共有し、次の瞬間、急速に俯瞰して既存の理論に照らし合わせる、このような連続するプロセスにおいて了解と発見を紡ぎ、そして現象を局所的に承認するプロジェクトの姿」等と指摘されています。ここまで表現してくれた言い方にとっても知的なものを感じました。

それは、個人モデル、社会モデル、医療モデルということだけではなく、帰納的、演繹的でもないもので、これらをなんて方法論、もしもアカデミアにこ

のプロジェクトの取り組みが生成する知が貢献するとしたら何が言えるかなというあたりを前から考えてはいて、それは村本さんが紹介してくれた、これは何学として表現できるのだろうかということと、常に通じ合っていて、アブダクションのことを思い出したのです。これは同時に、いろいろ犯罪・非行、違法薬物使用等の逸脱的行動の人とかをみていると、ものすごく傷があるんですよ。犯罪者たちの中の、特に非行少年なんかは被害性をものすごく持っている。それが逸脱行動になっていく面を見ていると、「絆創膏」という字がわかりやすいんですが、絆を創る薬なんですよ、絆創膏。傷のことを「創傷」って言いますよね、創造の「創」と「傷」、なんであそこに「創る」という字が入っているのかなというふうに、象徴的には考えていて、そうすると傷があることに絆ということとか、創るということが傷になるのかなとか、傷に基づくんだとかいろいろ考えていると、その脆弱性と創造性は関係してくると思いました。「きずな」には「きず」が同伴するんですよ。いろんな逸脱行動をする人は傷を持っているので何かを創造したくて切羽詰まり行動化してしまう。その逸脱行動に対応することでいろんな支援や実践や学問が生成してくるのです。これこそが創発性なのですね。

被災する、受傷する、排除されるということは、要するに社会的に孤立していくおそれを含んでいます。それはそこから別のつながりがうまくできずにいることを意味します。それでは困るので再生つまり、つながり方をいろんな形で表現できたらなと思っています。援助職者が見ているのは「傷」なので、傷のあり方が地域によっては創発的なつながりになっていくためには何が必要かなと思って、間接支援から支援者支援セミナーと称して学びながら取り組んでいます。その時に団さんの漫画を事例として使うことができました。

家族漫画から架空の事例をつくります。架空なんだけどもものすごく共鳴力があるので、それはスピアウトの企画と一緒になんですけれども、ものすごく共鳴力があるので漫画で描かれた事例を家族のケースとして使って、ウォーミングアップしたり、援助職者の滑舌を良くしたり、イメージーションを

豊かにするために活用します。公式にもいろいろ支援者支援が行われているのですが、青森プロジェクトで実施していることと同じような支援者支援をしています。研修と称してやったりとか、それから虐待なんかの場合は要保護児童対策協議会という、公式に語られているフォーマルな支援のセオリーがあるんですけども、通例のものはあまり創発性を重視しませんね。創造力を刺激しないんですよ、それはリスクを中心にしたアプローチだからです。人に×印を貼っていくばかりの対策会議や研修なのです。物語的にはあまり想像力がなくなっていくんですね。

そうではなくて、人は生きていてだけで十分だという面もあるとすると、生きていていろんな傷を持ちつつ、傷を相互に時にはなめ合いつつも、絆創膏のように少しずつ動いている、ローカルな知があって、そこをフォーマルな、支援の公式のセオリーではなくて、もっと光を集めるのはどうしたらいいかなということを考えていると、あの漫画展がとても想像力を喚起することに気づきます。それは漫画がフォーマルなものではないからです。ローカルなものです、不変性があります。それが多様な援助職者自身の個人的な資質を支援の実践知を賦活するのだと思います。いろいろやっている団さんの実践力と重なる面を素材に、そういうローカルな人たちと一緒に、共鳴し合うということがものすごくやりやすいんですよ。

プロジェクトによる支援といっても外から別に何かするわけではないので、地域の内的な力と共振することで活性化できたらいいなと思ってやっていると、現地の人たちが、私は青森プロジェクトなんですけれども、青森弁でワイワイガヤガヤとグループワークしながら、フォーマルなセオリーではなくて紡いでいる援助実践知というのはとても大事なんですね。それを何て名づけるのかなという意味で、当面「臨地の対人援助学」という言い方をしてきたのです。

最後ですけども、これらを何てまとめるかという際に、創発的な知の言葉や概念が必要でした。個人史的には、最初なかったものが見えてきたのはジェンダーという言葉との出会いなんですよ。ジェ

ンダーという言葉は、私が学生時代にはなかった言葉なので、澤野さんの時代にはすでにあっただしょうけれども。以前はなかったんですよ、それがフェミニズムとか、ウーマンリブとか、女性学とか、いろんな言い方をして、私なりに男性学という対応軸をつけながら、ジェンダー論として豊かにしていく知的共同体（学者のコミュニティ）のなかにいました。環境的正義も、臨床社会学も、臨地の対人援助学も、治療的司法も、すべて創発性の高い概念なのですが、このプロジェクトのような実践と不可分でした。頭のなかで創った言葉ではないのです。わりとどの分野でも同じようなことはいえるのでしょう。そうするとそういうものとして、もしかしたら臨地の対人援助学もさらに洗練されていく過程なのでしょう。

そこで出てきた言葉は、別に次の学問を創るというよりも、いろいろパースペクティブなものを広げてくれたり、共有したりさせてくれるひとつの視野を構築していくのが当面の課題なのだと思います。川野さんのいうアカデミアへの貢献ということにつながるのかなと思っています。あまり何学だと言って急いでまとめなくてもいいかと思っています。

村本 ありがとうございます。レスポンスになったかどうか、もしも不十分でしたら、さらに言って頂いてもいいですし、新しいことでも。澤野先生からお願いします。

被災地の、あるいは外部の研究者に 何ができるのか

澤野 考えがうまくまとまっていないんですけども、団先生のおっしゃった、ものすごい防波堤が、防災というより、これだけ金を使っているんやということを見せつけているというお話がまさに、被災者の方たちっておそらくそういうところをととても敏感に感じていると思うんですね。私がコメントの中に引用した内尾太一さんの著書では、津波ではなく防波堤に不安を感じる人々の存在のことに言及していますが、やはりそういう、支援者によって引き起こされているものが必ずしも純粹にその人たちを助

けているとは限らないというか、いろんな受け取られ方がされているということを示す事例だと思って、団先生のお言葉を非常に興味深くお聞きしました。

あとは、鶴野先生が引用された「防災エリートになっただけではいけない」というお話や、村本先生の、臨床心理士として話は聞かないけれども、臨床心理士ということも張り付いているので語りを引き出していく、というお話をお聞きして、現地の人たちとの関わり方の難しさというか、曖昧さというか、非常に繊細な部分というのを感じさせられました。その中で、被災地にいる研究者たち、あるいは被災地に行かないけれども何かしようとしている研究者って何ができるのかなということに改めて考えさせられました。まだそこまでしか考えがまとまっていないのですが、以上です。

村本 ありがとうございます。それでは、川野先生、お願いします。

小さい問い合わせの中に胚胎する 長い時間の豊かさ

川野 もうちょっと考えたいなと思うことがあります。昨日、「ラスキンを読む」という勉強会に出たんです。ラスキンという人はアーツ&クラフトの活動の源流にあたります。つまり芸術を身近に、貧しい人たちにも…という言い方はちょっと、語弊があるかもしれませんが、貧しい人たちにもアートの力を、そして自分たちなりの幸福を求めていく。

その勉強会のディスカッションの中で豊かさって何だという話があって、スタジオLの山崎亮さんが2軸で4次元に分けて説明をしていました。個人対集団、能動対受動に分けると、受動的で集団的なものが今日的な消費の楽しさなんだと。みんなでボーリングに行くとか、カラオケに行くとか。これは短時間で、みんなで楽しめるんだけど、そこで終わってしまう。

他方、能動で集団となると、これ以外のものになる。

つまり、いわゆる狭い意味のエコノミー、お金を

使って楽しさを得るといふ以外の部分がないと、この集団で能動的な楽しみって生まれてきませんよね、そこに豊かさがありますよね、みたいな議論ですけれども、団先生が話された、百年の生物の話とそれが響いているんですね、今私の中で。お金で解決したほうがいいこともたぶんずいぶんあって、特に被災地で緊急対応のところは、見えやすくわかりやすく具体的な支援というのがやっぱり必要なんだと思うんです。だけど、その連続だけでは支援になっていかないというのも、もうひとつの真実だというのが、このプロジェクトの意義なのかなと思うんですよね。

お金が循環するのがエコノミーだと言ってしまった時に何かが抜け落ちる。じゃあ、何が循環した時に別の豊かさであったり、あるいはここで言うレジリエンスであったりするのかな。ここをうまく問うていけるといいんだろうなというふうに思いました。そのカギは、ひとつは斎藤先生や中村先生がおっしゃってくださっている、アプローチの仕方だろう、というか、5本すべてに共通しているのかな、村本先生がおっしゃってくださった小さな物語もそうですけれども、この小ささって結構カギなのかもしれないと思いました。

小さいってどういうことなのか。先ほど循環という言葉を使ったんですけども、循環ってすごく雑な見方になり勝ちで、何かが回るとか、回復していくとか、元へ戻るとか、支援するとかって言ってしまうと、上から俯瞰して記述しているだけで、実際には澤野先生が指摘されたアクティブ・インタビューのようなその場の個別性、1回1回の出会いのところでお互いに何が知りたくて、何を説明しているのかという、すごく小さい問い合わせの中できてるもの、そっちを粗雑に扱ってしまう。おそらくその中にこそ、別様の豊かさが胚胎しているのに。このことが結局、長い時間の豊かさを作らない条件になってしまっているような気がするんですよね。

私が、語り手のオリジナリティというか、クレームが生まれるんじゃないかということを書いたことについて、団先生が作り手として、漫画の作り手としてはそれを言い始めたら…というお話があったと思うんですけれども、ここにもタイムスパンのズレ

みたいなものがあるって、このタイムスパンのズレのことをちゃんと意識していることが、実はこういう大きな支援の流れの中ではすごく大事なことなのかもしれないというふうに思いました。

被災地でときおり聞くことですが、記者が聞くことは答えの枠があるという話です。「…でしょ」っていう、「長い時間仮設住宅で過ごしていて寂しい中で、だんだん訪ねてくる人も少なくなって辛かったでしょ」って、それで「はい」って答えてほしいという、ここには物語の小ささが持っている、なぜ聞きたいのか、相手がだれで自分はだれなのか、みたいなものが全部捨象されてしまった語りしか生まれていない。

この時にこれが新聞に載ったならば、語った人はすごく違和感を感じるわけです。「私が言いたかった話とは全然違う。また同じ話がここに乗っかっている」という、こういうふうにならないということのために何ができるのか、みたいな話というのが今日の先生方のコメントの中にすごく一つひとつ入っていて、もうちょっとちゃんと吟味したいと思うんですけども、私自身、すごく「答え」というよりも「問い」をいっぱいもらった感じがしています。

齋藤 また眠れなくなってしまう。

川野 そう、また眠れなくなってしまう。

正しい説明という暴力

齋藤 今の最後の話でちょっと誘発されたので、少しずれるかもしれないんですけど、発言させていただきます。「ちょっとマスコミが・・・」、というのはものすごくよくわかるんですけども、ちょっとマスコミがけしからんで終わってしまう議論が今すごく多いので、それとは少し別の観点からお話したいと思います。私の同僚の岸本君という人が『正しい説明という暴力』という本を出して、これが物議をかもしているんですけども、何か、物語がいろいろ語られるのはいいんですけども、先ほどで言えばローカルな、小さいものというのはスルーされてしまう。「ちゃんと語り合っているからいいじゃ

ん」みたいな中で、実はユニークな物語が大きな上からの物語によって妨害されてしまうということが起こりうる。上からということは、要するに一般性があると称している物語ですよ。それが本当に一般性があるかどうかは別の問題ですが。特に現場がまだアタフタしている時に、一般を称する物語が語られると、その時にものすごい違和感が生じるというか、エネルギーを盗まれるような気がするんです。

ちょっと差し障りがあるかもしれませんが、今回の北摂の震災の時に私がちょっと感じたのは、善意だとは言え、前の震災ではこうだったから、例えば余震が来ると危ないぞ、みたいなものが、本当にその場、まだ電気がついていなくて1人で過ごしているようなところに、情報として言われるんですね。それって、全然、まさにモータルではないというか、士気を上げないんですよ。その時に、それって反論のしようがないんですよ。「余震が来るかもしれない、来たら大変なことになる、最近だと余震のほうが大きいんだ」と、これはたしかにうそだとは言えないんですが、じゃあ、本当にそれが起こるかと言えば、それは何とも言えないし、むしろ起こらないほうがずっと頻度的には高いわけです。そこでそういう発言が優位になるということは、どうなんだろうというのがすごくあったんですね。それは専門家である医師が健康問題を語るのに似ていて、例えば「あなたはコレステロールが260あると、これは放っておくと心筋梗塞になる率が何%増えるんだ。心筋梗塞で死んでしまう人が今は3分の1くらいいるんだ」というようなことを言われると、私にそれが起こらないという安心感を持つというのはほとんど不可能になってしまうんですね。だからそれを、あえてその場で語るかということの判断を専門家は求められるのです。

結局、何のために「あなたはコレステロールを下げなければいけない」という物語を語るかということ、語る人の権威性の問題なんです。それが科学的に正しいかどうかというのは、実はあまり関係がなくて、そういう権威者というのは要はそこで発言したいわけです。だから、せっかくの語り合いの中で「ミニ権威者」がたくさん出てくる。そういう時に本当にそれで力を奪われた者はだれかということ、実はまだ

そんなに大した被害を受けていない人なんですよ。だから被害者として主張することさえ奪われている。だって実際に悪いことは起こっていないわけですから。

もちろん不適切な語りであってもいろいろな意見が出ることでバランスがとれますので、そういう語りを制限するというのは、あまりいい方法ではないと思います。そういう余震の話が出ると、「いやいやそういうことはないよ」とか、あるいは「今のデータではこうなっているよ」とかって、また必ず語ってくれる人が出ます。そういう形でバランスはとれます。しかし、特に影響力を持った人が語るときには、そういうところに相当注意しなければいけないんじゃないかなと思うのです。それが、川野先生が「不適切な語りがあるから」とおっしゃった時に一番感じたことです。

川野 その語りそのものが不適切というよりも、他の語りを改修してしまったり、支配してしまったりする語りなんです。

齋藤 そうです。そのような語りは、最終的にその人をエンパワーしないんです。一方で、そのようなことをリサーチレベルで言うと、じゃあ、それにどうアプローチできるかということになるのですが、やっぱり課題を捨てていくしかないんですよ。そういう時に何が起きているかを、リアルタイムで課題を捨てていく。そして何が起きているかをある程度冷静に描き出して、だれが悪いとかそういうことではなくて、そういう時に何が起こりやすいか、それに対抗する手段としてどういうものがエンパワーメントできるか、みたいなことを丁寧に扱っていくことかなというふうに思います。

想像を超えたものから物語は立ち上がる

村本 川野先生がおっしゃった「答えのある問い」、記者の話から思ったんですが、私自身が印象に残ったものとしてショートストーリーをまとめる時にわかったことは、自分の中に答えがなかったこと、自分の想像を超えたものこそが印象に残っていく。だ

から、自分の中に答えがあったこと、想像の範囲内だったことはストーリーとして立ち上がってきにくい。そういう意味で、被災地に行って「えっ、そうなんだ」とか、「そんなことまでは思いも及ばなかったな」というようなことがピックアップされた。だから、最初に自分の中になかったものが見えてきた時に、揺さぶられ、物語が生まれてくるのだと思う。

それから、鶴野先生の書いたもので、山元町の話と、遠野物語 99 話について今回書かれたものを見ると、私の中に立ち上がった物語とはまた違うということが、すごく面白い。山元町に行って「こうだな」「ああ、そうか」と思ったものが、次に行くと、また全然違うものが見える。そして、また行くと、また違うものが見えていくという、その差異というか、要するに自分がそこに行き、見えなかったものが見えるようになるという積み重ね、あるいは、一緒に行き同じものを見ているはずなのに、違うものが見えていくという。そこを繰り返し繰り返し丁寧に振り返っていくこと自体が検証のプロセスかなと思う。たとえば、団先生や鶴野先生と一緒に同じものを見たり聞いたりしていることが結構あると思いますが、私の物語を読んだ時に何かそういう差みたいなものを感じたかどうか聞いてみたいと思いました。

それから、齋藤先生がおっしゃった「余震が」というような話について、私はむしろ、いろんな被災地に関わるなかで、熊本に行った時に、「ああ、そういうことがあるんだ」という印象深いエピソードだったんですよ。熊本で親しくしていた方たちが被災して、片づけした途端に本震があって、そのことでもう力がなくなってしまったという話は、私の中では思いもよらない話でした。地震があった時にすぐさま片づけるのではなく、デンと構えて、これから何があるのかまずは見てやろうというふうに思えたことは、私自身、被災の衝撃から自分を守るのに役立ったというか、エンパワーしたんですよ。

齋藤先生がおっしゃったように、それぞれが違うことを感じたり、理解したりすることを語り合うことで、それぞれのレパトリーを増やす。団先生や中村先生とやるワークショップの中で、ジェノグラムを使って、そこからどんなことが想定できるか、

できるだけたくさんの方のことをみんなで考えるという方法があります。別に当たらなくてもいいから、起こり得ることを多く想定できると、いざという時に落ち着いて対応できる。だから、いろんな物語を知っていることがレジリエンスを高めるのかなという気がしている。

そういう意味でひとつの大きな枠組み、上からの物語に回収されることなく、それぞれにとって意外な出来事ということがその都度持ち寄られて、語り合われて、更新されていく、そうやって考えられる可能性のレパートリーが広がっていく、それがすごくいいことなんじゃないかなというふうに思っています。

私が書いたショートストーリーを読んだ時に、この話は自分の物語と違うみたいな感じというのは何かありましたか。現実を構成する面白さというか、このプロジェクトが目指す小さな物語が、正しさを競うのではなく、現実を複層的に浮かび上がらせるというふうな思いがあるんだけど…。

鶴野 やっぱり受け止め方が違う場合もあると思いますよ。一例をあげると、No.45「語り部の被災体験」のストーリーは、僕が同じ場面を共有していたエピソードなので興味深かったけど、僕の解釈とはちょっと違ってました。語り部の女性ガイドさんは、今年（2018年）の11月にも案内して下さって、おそらく2015年から4回連続して担当して下さいと思います。はじめて彼女が語り部ガイドをした時の相手が立命の学生だったので、立命に対して良い印象を持っている、だから今回も手を挙げさせてもらった、という話をいつも最初にされて、緊張している学生たちの心をほぐして下さる方です。確かに、2015年にはご自身の家族のことを話されたのに2016年にはそれを口にされなかったということに、このショートストーリーを読んではじめて気づいたんですけど、「彼女が話しすぎはしなかったか」というふうには僕は思わなかった。気楽に考えすぎかもしれないけど、良い印象を持っている立命の学生たちや、繰り返し来ている教員たちに対して、2016年にはまた別の話題を提供しようとしてくださったという解釈もできるように思います。

語らない人々のこと

団 今、村本さんが聞いていることについて話したいことがあるわけではないんですけども、鶴野さんが「黙っている力」というか、そういう話をしたでしょ、あれで今日、ここでしゃべっていて気がついたんですけども。

ギャラリーに来て、なにか話してくれる人のことは書きました。でもギャラリーに来て、決してろくに読みもしないで立ち去った人ではなくて、ずいぶん時間をかけて読んでくれているのに、何も言わないで去る人がいます。この人は確実に読んでいます。じっくり読んでいるから、きっと受け止めているものもあるはずなんだけど、語らないんですよね。

この人の調査ってできませんよね。一般的な調査では、こういう人の存在は見えない。つまりインタビュー調査をしようと思ったら、答えてくれる人が対象だから、答えてくれない人は対象ではないですよ。でもギャラリーの場合は、見に来て、じっと作品の前について、語らないという人もいる、これがおじさんなんです。

私がギャラリーでお話を聞いたのは圧倒的に女の人です。そうすると黙っている男の人というのは、男は一般的に黙っているとは思わないけれども、黙っている人に届いている物語があって、この人は読むけれども語らないという、そういう人がギャラリーにはいるんだということが見えていたんだなと今気がつきました。あまり思ったことがなかったんです、そんなことは…。

やっぱり話しかけてくれる人とか、こちらが冊子を手渡したら、「これはおたくが描いたんですか」というところから、始まった人から受け取れるものが多いから…。だから、黙ってられるということの力もね。

でも漫画家の立場から言えば、読んでくれた人がみんな感想をよこすというのは現実的ではありません。ほとんどの読者は黙っているのに、また購入してくれたりする。そういう意味で、黙っている人たちが物語をどう受け止めて、何をそこに…ということとは調べられないなあと思っていました。

村本 ここでも表現したつもりなんだけれども、被災というのは言葉にならない体験であって、たとえば1年目の何もないところでの描写、私自身が主人公として感じたことを書いたものがある。何もない、茫漠たる、延々と続く空虚みたいなところのことを書いたエピソードが2つあるんですが、その2つだけはものすごく文字数が少ないんです。それは、自分自身ですごく面白いと思ったことでした。

あと、仮設住宅の子どもたちを描いたストーリーが1つあるんですが、それも本当にインタビューでは語りようのない、その場を見て、語られないけれども感じるもの。あるいは、少しだけ書いたけれども、福島状況については、理解すれば理解するほど語れなくなっていくという側面があって、それは、ある意味で被災の中核にいる人たちが経験していることの、本当に小さい疑似体験のよう。経験した者は、言葉で語れること、表現されることに大きな溝とか、理解のされなさとかを感じるということ、被災地に馴染むにつれて、自分自身も感じるようになっていく。だからそういうところ、インタビューしても語られないこと、自分が体感したことをできるだけ言語化する努力をする、ということをしているかなと思いました。

あと、どうでしょう。せっかくの機会なので、もう少し、ざっくばらんに思いついたことでも話せたらと思いますが。

ある種の鈍感さが地域の物語力を鍛える!?

川野 私が岩手で聞いたのは、沿岸部に住んでいる人と、山間部に住んでいる人では被災の話ができないう話です。その理由には、自分のほうが被害がちょっと少ないから、というのもあるし、ましてや相手がどこに住んでいるのかわからなければ切り出すこともできないということがある。団先生が「センシティブな人が大勢で押しかけて行って多様な人の話を聞く」と指摘された構造もすごく面白いなと思ったんだけど、被災地の中ではやっぱりいくつかの構造下で物語が発生しているということがある。研究といえどもすべてを拾い上げているわけではないというのは改めて確認したなあと思うん

です…。

翻って、ではこのプロジェクトの「証人」というコンセプトです。証人が被災地にいる、あるいは被災地外で想っているって何だろう。これも昨日の「ラスキンを読む」でまちづくりについて語られたことをヒントにして考えたのですが、被災地に証人がいっぱいいると、どこで語ったらいいとか、語ったらいけないとかっていうことに鈍感になっていかなあと思っ、無遠慮に話し出す人や聞き出す人がたくさんいる地域って、結果的に話しやすい地域になっていくかもしれないと思うんですね。そうすると、雑な言い方なんですけれども、雑菌が入ったほうが強いと。地域のレジリエンスとか、個人のレジリエンスっていうふうに括るのならば、地域の、ですけども、一人ひとりの物語が強くなるというよりも、物語事例がたくさん起こった地域は強くなる、物語的に強くなるというか、ちょっとやそっとの語りにくさみたいなものは消えていったりしないかなあと…。

そういうきっかけとして、例えば中間性の高い漫画のような物語というのも1つの入り方だと思うし、もっと距離を詰めていく、村本先生がどういうふうに詰めていったかはよくわからないんですけども、ある種の当事者性を近づけていくような聞き手が入っていくだとか、そういうようなことがもしかすると、ある種のレジリエンスの源になったのかもなあと、今聞いていて想像しました。

語り出すことにポジティブな feed forward があれば

齋藤 ちょっと刺激されたので、今。私も全く想像のレベルなんですけれども、語れない、あるいは言葉を奪われている人がいて、その人たちが関心を持たないということもあるということ、をきちっとわかっているということ、はすごく重要だと思います。そうなんですけれども、やっぱりそういう人たちをどうやって語らせるかではなくて、むしろ語り出した人がどういうふうによばれるかによって、たぶんその流れというのは変わると思うんです。よく自助グループなんかでも、どっちが苦労しているかとい

うような雰囲気になってしまって、それ自体がもういやだということで自助グループを離れる人の話をよく聞きます。話しにくさというのは場によって作られてしまうことであるわけですね、どういうふうに作っても…。

でもそれをどうやってできるだけ話すチャンスを増やして、話した人がちゃんと受け入れられている、きちんと聞いてもらっている、関心を示されているという体験をしてもらって、それを見ている人が「じゃあ、おれも…」って、ちょっと話したらみんなが関心を持ってくれる、そういう場をどう作るかが大切なのではないかと考えています。そうすると、これってやっぱり、実はわれわれが毎日やっているような教育の場と一緒だなと思うんですね。

グループワークの中で、どうやって全員に話したいことを話してもらおうか。それって意外とやっぱり、ローカルだけでも現実味のある話で、うまくいっている時はたしかにうまくいくけれども、ちょっと間違えると全然みんなしゃべらなくなる。これってすごく普通のことという気がします。そういう意味で、要するにしゃべるか、しゃべらないかは、しゃべり出した時にどうなるかという、頭の中のイメージで決まるんだと思うんです。だから feed forward なので、まだしゃべってみなければわからないわけですね、受け入れられるかどうかは。にもかかわらず、しゃべっても大丈夫だろうというイメージがあればしゃべれるし、しゃべってひどい目に会うと思っていたら、それは過去の経験から作られているんだけど、しゃべれませんよね。だから偶然の機会でしゃべらない限りは、大丈夫ということが体験されない。なので、私はちょっと連想ばかりで申し訳ないのですが、やっぱりいろんなチャンネルがあったほうがいいと思うんですね。

3人くらいだったらしゃべれる人とか、1対1だったらしゃべれる人とか、意外と大勢の前だったらドツとしゃべれる人とか、あるいは字なら書ける人とか、いろんなケースがあるし、その人のそれまでの生き方とか、性格とか、そういうものを全部含めて。だからどんな形であってもしゃべってみたら、あるいは発信してみたらうまくちゃんと関心も持って、つまり証人がいる、という体験をどうやって作

り出せるかということが大事なんじゃないかなと思うんです。

そういう意味では、あるところではどんどんしゃべってくれる、そういう人たちが大切にされれば、本当はしゃべりたくない人にはむりにしゃべってもらう必要はないわけですから、しゃべりたいけれども feed forward がネガティブになってしまっている人をどうやって、みんながあなたに関心を持っているということを実体験できるようないい体験をしてもらうかということが大切っていう気はします。

多様な物語や表現が促進されること

鶴野 それで言うと、言葉で語る以外の表現というものもあるわけで、それは先ほど中村さんが、伊勢の人びとが民俗儀礼とか、お祭りだとか、そういう伝統行事の中で生かされているという話をされたんですけど、今、東北でも被災地を中心にさまざまなお祭りを復興しようと、震災前よりもむしろアクティブにやっているところもあるんですね。

やはりその理由のひとつは、言葉での自己表現は苦手でも、体で、というか、みんなが集まってお祭りをするとか、あるいは何か踊りをやるとかっていうふうな形の表現活動、それを個人のレベルでやる場合もあれば、集団のレベルでやる場合もあるし、自治体や民間企業などがオーガナイズして「六魂祭」のような形で大きなイベントとしてやる場合もある。やっぱりお祭りをはじめとする民俗儀礼的な、伝統行事的なもの、その中に別の形のアンデンティティを見出して、そしてその中に身を投じることで自分を表現しようというような、別の表現手段としての物語というものがあるんじゃないでしょうか。

村本 川野先生のレジリエンスというのは、結局、雑菌がたくさんいる地域の物語力の強さというのに、なるほどな。団先生が言うところの、みんなが繊細で、こんなことをしゃべってはいけないんじゃないか、誰かを傷つけるんじゃないかみたいなことばかり言っていたら、結局、誰も何も語れなくなる。無遠慮な人がいても、傷つく人がいても、そ

れらが語られて雑菌のように地域が鍛えられていく
 というか、その中で自分はこう思うんだとそれぞれ
 に異なる物語が表現され、受け入れられる社会であ
 れば、いろんなことに対してレジリエンスなんだろ
 うなとあらためて確認しました。

そういう意味では、今、東北で活性化している民
 話、今回は鶴野先生が描いてくれた民話の活動って、
 そういうさまざまな、本当に理不尽だったり、99話
 のように最初は意味不明な話だったり、とにかくい
 ろんな種類の話を書いていく意味が、その時はわか
 らなくても人生のどこかの時点でふと思ひ出され
 て、同じひとつの話でも、この時はこういうふう
 に捉えていたけれども、違う人生経験をした今では
 こんなふうに思えたというようなことがあると思いま
 す。団先生の漫画もそれと似たような力を持っている。

とにかく多様な物語が語られることが保証される
 こと、それから、言葉だけではなく、身体表現、民
 話も書き文字ではなくて、一体感や共振性、身体レ
 ベルで波動が伝わるといふか、そういうところも含
 めての表現が保証されていることで、その地域の力
 は高まるのではないかと思います。

遠野物語の99話ね、私、震災の年に出会って「何
 なの、この話!？」とびっくりしたところから、いろ
 いろな出会いを重ね、その都度その都度、違う角度
 から理解をするようになった。鶴野先生の手書か
 れているような「大平さんの理解はそうなんだなあ、私
 とはまた違う」と思ったり。今たどり着いていると
 ころは、先週仙台に行って、未来へと歩みを進めて
 いくコミュニティからこぼれ落ちてしまう人たちの
 ことを考え、そういう人たちの存在をどういふふう
 に忘れ去ることなく、証人として包摂していくのか
 という、そういう話だったのではないかと思うよう
 になりました。

子孫の後日談で、あの主人公は今で言うPTSDの
 ようなもので、頭がおかしくなってその人の話はタ
 ブーだったと聞いたんだけど、そういう存在も
 消し去ることなく表現していく、伝えていくとい
 う力が民話にあったのかもしれない。震災後に活
 性化した東北の民話や祭事が新しく形を変えて生ま
 れていくことを書きましたが、その中にコミュニティか

らこぼれてしまいそうな人々をどんなふう
 に含み込んでいくのかを今後しっかり見たいと思っ
 ています。

ローカルな日常に満ちる多声性～かき消される 声、抑圧される声、沈黙、そして蘇る声

中村 私は「雑菌」を消去しようとするような社会
 圧力がとても強いなと思っています。そこでの対抗
 としては多声性を重視しています。そのために対話
 ということが大事だなと思っています。聞くとか話
 すとか、物語、ナラティブですね。私自身の実践と
 しても対話の世界なのです。司法の領域の実践だと、
 被害者や加害者との対話となります。なかなか困難
 な局面の対話ですけども、そこには公式の刑罰や責
 任のストーリーがとても強く作用し、語彙がでて
 きません。でも逸脱の語りには合理化、正当化、トラ
 ウマ等いろいろこの社会のノイズのようにみえる声
 が聞こえてきます。社会のなかでは滅菌させていき
 たい事項です。逸脱の語りまでいかななくてもいい
 ですが、そのままとかき消されていくような小さ
 な声、声になりにくい声、無視されがちな声がロー
 カルな日常には満ちています。雑菌的でもいいし、
 断片的でもいいし、小さな物語でもいいし、あるい
 は逸脱のような非日常のいろんなものがこうやって
 出てくるのが大切なのです。多声性は沈黙作用が
 働く事への対抗、主流の物語化できない声があるこ
 との発見です。抑圧されるし、語り得ないものが存
 在していることの確認と承認ですね。そこに対して、
 形を成してはいないんだけど大事なものがあ
 るねってということで、援助職者も気付くことが大事だ
 し、先ほど言った支配的な援助論がものすごく強く
 出ているので、そうじゃないなということに協働し
 て気づいていく、その際にアートの力がとても強い
 力をもつなと思っています。

そこで余白みたいにしてある世界にどう気付くか
 とか、さらに、犯罪者とかは私にとっては想像力を
 喚起させてくれるので、こんなふう生きてきたん
 だということに気付かせてくれる面があります。そ
 れは社会の排除性や秩序性の一面に気づくといふこ
 とでもあります。そこでの対話をどうするか、言語

化するとか、アートでいいんですけども、表現するとかいうことで回復の力が出るので、相談できないあるいは沈黙をどう視野に入れて、私たちの地図に描けるかというのは関心があってやっていることなんです。

村本 11月の質的心理学会のシンポジウムで「土地の力」をテーマに発表して、山元町の話を紹介したんですけども、先祖が伝えようとしていた津波への警鐘を十分に受留めてこなかったという悔いをエネルギーにして、今こそ語り継ごうとしている人々に対し、コメンテーターの伊藤哲司さんによれば、プーケットでは誰も何も語り継がないと。記念碑なんか日本ではたくさんあったし、今回もまたたくさんできたけれど、プーケットには何ひとつない。正確に言えば、1つだけ日本人会が建てたものがあるそうだけど。さまざまな経験にもまれてレジリエントな人たちなのか、あるいは宗教的な背景とか死生観によるものなのか、ちゃんと勉強してみないとわかりませんが、語り継がないというレジリエンスもあるのかもしれないね。

戦時中のこととか、ナチスのことでも、最近では東京大空襲で何もかも失くした人々が北海道へ開拓に行くという話がNHKで初めて紹介されていましたが、ずっと語られなかったものがこれだけの時間を経て、物語としてもう一度息吹く、それが人間の歴史の面白いところだなと思います。人はすぐに忘却したり、抑圧したりするけれども、これでもかこれでもかと、やっぱりどこかに芽を出していく。それこそが物語の持つ力なのかなと。

中村 文化もそうなんだけれども、忘却だけではないと思うんですね、伊勢志摩のあたりにはたくさ

んの祭りがあります。一般にお祭りは災厄を払いのけようとするものです。海にまつわる災難をテーマにしたものが多いのです。個人的な事情ですが、私の父方の家系は網元なんです。網元というのは浜を管理しているので、網元の人は責任があります。海難事故が多いので難破船が流れついできます。海流のせいで浜に流れつきます。その船の処分をします。そのかわり責任があって、そこで死んでいる、海で亡くなった、舟でもし死んでいたら弔うことになります。海を支配する者の責任ですということになります。網元は、その浜に30軒なら30軒の舟があるとすると、だれかが海で死ぬと家族を面倒見ます。一種の生活共同体です。多様な海の物語が結構あります。お祭りにもあります。祭りの多くは災厄との関わり、つまり何らかのトラウマ的な体験の物語化だといえそうです。それが連綿と続いているのですから、個人化ではない集合的なケアの仕組みとしての地域文化となるのでしょうか。そうすると、幼い頃聞いた、海とともに生きている人たちの生業が見えてきます。それは別に教訓とか、何でもないんですけども、ある共同幻想みたいに見えてくるものです。それは語り継ぎでもあります。臨地の対人援助学はこうした掬い取りが重要でしょう。

村本 そろそろ時間ですね。こんなふうには、答えを出さない、結論のない、プロセス自体が検証で、どれかひとつが正しいのではなく、いろんな側面を浮かび上がらせられるプロジェクトとして続けていけたらいいなと思っています。今日はありがとうございました。

(2019.12.3 受理)
(ホームページ掲載 2020年4月)